人魚傳說

――『山海經』を軸として――

松岡正子

一、氐人國
二、海人魚
三、鮫人

人魚のことが世に廣く傳えられるのは、それが半人半魚の美女であり、男を誘い、溺死させる危險な存在であったからだろう。

半人半魚の最古のものは、バビロニアの水神エア（男性）といわれる。女體の人魚は、シリアの女神アタルガティスにはじまり、ギリシア神話では、美しい歌聲で船乘りを誘う女面鳥身（時に魚身）の神セイレンとしてあらわれる。そして世界の各地で實見談として人魚のことが傳えられるようになるのは、十五世紀頃からという。(1)

一方中國では、六朝の頃、樂浪近海に海獸が出沒し、それを人魚とよんだことが記されており、また南の海には、眞珠の涙を流すという鮫人のことが傳えられている。しかし「人魚」という語は、秦漢の頃、黃河中流域では、ある水生の爬行動物をいうものであったらしく、このあたりからは、魚紋と獨特の人面紋の描かれた古代仰韶文化の彩陶

土器も多く出土している。また當時の地理書『山海經』には、中國の西方に「氐人國」という、半人半魚の人の棲む國のあったことを傳えており、中國における人魚の傳承が、古い起源をもっていることをうかがわせる。

一、氐人國

「人魚」は、秦漢の頃、伊・洛河を中心とした地域において鯢魚（サンショウウオ）をさすものであり（明・李時珍『本草綱目』鱗部鯢魚鰳魚の條）、『山海經』五藏山經には、たびたびこの「人魚」のことが記されている。(2)

又西五十二里、曰竹曰、…丹水出焉、東南流注于洛水、其中多水玉、多人魚。（西山經）

又東北二百里曰、龍侯之山、…決決之水出焉、而東流注于河。…其中多人魚、其狀如鰳魚、四足、其音如嬰兒、食之無癡疾。（北次三經）

又西二百里、曰熊耳之山、…浮濠之水出焉、而西流注于洛、其中多水玉、多人魚。（中次四經）

又西一百四十里、曰傅山、…厭染之水出于其陽、而南流注于洛、其中多人魚。（中次六經）

又西九十里、曰陽華之山、楊水出焉、而西南流注于洛、其中多人魚。（中次六經）

又東北一百五十里、曰朝歌之山。澮水出焉、東南流注于滎、其中多人魚。（中次一十一經）

又東南二十五里、曰箴山、視水出焉、東南流注于汝水、其中多人魚、多蛟、多頡。（中次一十一經）

又東五十里、曰少室之山、…休水出焉、而北流注于洛、其中多鰳魚、狀如盩雖而長距、足自而對、食者無蠱疾、可以禦兵。（中次七經）

鯢魚とは、蜥蜴型の兩生類で、『本草綱目』によれば、鯉鯷鰳鮎に似た細長い胴體と四本の足、長い尾をもち、子供の泣き聲そっくりの音を發して「孩兒魚、娃娃魚」ともよばれる。また中國のサンショウウオには鯢と鰳の二種が

あって、鯢が山溪中の澄んだ急流に生息して、發達した足の爪で木をすばやく上るのに對し、鯑は湖にすみ、腹下に翅型の退化した足をもち、漁師はこれが網に入ると驚いて棄てたという（唐・劉恂『嶺表錄異』下）。さらに日本のサンショウウオが十センチからせいぜい五十センチ程度であるのに對し、中國產のは、最大のものは百八十センチにも達し、現存する世界最大の兩生動物である（中國科學院『中國の動物地理』）。水邊から子供のなき聲らしきものがきこえ、人ほどの體長の生き物が兩手をついて地面を這いまわり、木を上り、或いは人頭の如き扁平な物體が水中に浮んで魚のように移動するのをみた時、それは、人を連想させるに十分なものがあったと思われる。

また諸記錄によれば、「人魚」の產地は、伊洛の河の上流域から黃河の河曲部一帶（『山海經』五藏山經）であり、鯢鯑の類は雅州西山峽谷（晉・常璩『華陽國志』蜀志）、商州（唐・劉恂『嶺表錄異』下）、峽中（唐・段成式『酉陽雜俎』卷一七）、荊州臨沮の青溪や（『本草綱目』）西南の金義、靈川（廣西省）にも及び（『嶺表錄異』下）、秦では鰨、蜀では鮥とよばれている。つまり「人魚」という語は、漢以前、黃河中流域を中心に通用した言葉であり、このあたりから出土する古代の土器が、魚紋を主要モチーフとし、魚と人面の合體を暗示する人面紋をもつことから、人と魚、蜥蜴型の生物とは、「人魚」の語によって象徵される共通の意識世界に屬するものと思われる。

ところで中國西南部には、鯢に似た蜥蜴型の爬虫類「鯪鯉」が棲息している。鯪鯉は、龍鯉、石鯪魚、穿山甲ともよばれ、湖廣、南、金、商、在、房の諸州の深山大谷中にすむ（『本草綱目』鱗部鯪鯉の條）。

鯪鯉狀如鼉而小、背如鯉而闊、首如鼠而無牙、腹無鱗而有毛、長舌尖喙、尾與身等。尾鱗尖厚、有三角。腹內臟腑俱全、而胃獨大、常吐舌誘蟻食之。

さらに鯪鯉という實在の爬虫類は、神話化されて、鯪鯉（『楚辭』天問）、龍鯉（郭璞「江賦」）、龍魚（張衡「思玄賦」及び『山海經』海外西經）、陵鯉（左思「吳都賦」）、陵魚（『山海經』海內北經）、碓魚（『淮南子』墜形訓）ともよばれ[3]、特に

龍魚と陵魚については、人面魚身の「人魚」の形狀にえがかれている。

龍魚陵居在其北、狀如鯉。一曰鰕。卽有神聖乘此以行九野。一曰鼈魚在夭野北、其爲魚如鯉。（海外西經）

陵魚人面、手足、魚身、在海中。（海內北經）

またともに、出現の際に光や風雨が起こるという龍の屬性が想定され、龍魚は「頂上有光、迎風潰流」（『太平御覽』卷九三九「鰕」引『異物記』）、陵魚は「見則風濤。」（『楚辭』「天問」補注）と記され、神話上の「人魚」は、人面魚身であり、また風雨をよぶ龍の屬でもあった。

というのもそもそも龍という想像上の動物は、かつて地球上に存在したという巨大な爬虫類の記憶であるともいわれ（南方熊楠『十二支考―田原藤太龍宮入りの譚』）、蜥蜴型の爬虫類は、その現實における姿とみなされた。そこで蜥蜴の類[4]は龍の代用として請雨の儀式に用いられ（晉・葛洪『抱朴子』內篇佚文）、山間の澤地に出沒する蛇師は雨乞いに使われ（『酉陽雜俎』）、岩の間を徘徊する石龍子は、口の中に水を含んで雹のように吐きだすことから龍の屬とみられ（『本草綱目』鱗部石龍子の條）、巨大爬虫類の鼉龍は、夜、更每に鳴くことから（鼉鼓）、俚人はそれを聞いて降雨を占った（『本草綱目』鱗部鼉龍の條）[5]。このように古來、蜥蜴型の爬虫類は龍の屬とみなされていたために、それを原型として神話化された「人魚」にも、龍の屬性が想定されたものと思われる。

また神話上の人魚における「人面魚身」については、大魚に關連しても語られ、河伯冰夷は大魚の出現がそれとみなされ、

齊人有謂齊王曰、河伯大神也、臣請使王遇之。乃爲壇場大水之上。有閒、大魚動、困曰此河伯。（『韓非子』內儲說上）

人面魚身の形狀をもつ。

禹理水、觀於河、見白面長人魚身出、曰吾河精也。授禹河圖而還於淵中。（同・尸佼『尸子』）

そして龍に乗る神とも語られる。（『酉陽雜俎』諾皐記上）

從極之淵深三百仞、維冰夷恆都焉。冰夷人面、乘兩龍。（海内北經）

つまり神話上の人魚は、人面魚身であり、人面蛟（龍）身でもあった。蛟は「似蛇四脚、龍類」（海内西經　開明の條郭璞注）であり、まさに蜥蜴型爬虫類の形状をもつ。

一方、『山海經』における蛟蛇と魚との境界はかなり曖昧であり、

自此山來、蟲爲蛇、蛇號爲魚。（海外南經、南山）

五藏山經においても明らかに兩生類とみられるものが魚の屬として記される。

鯥魚…其狀如牛、陵居、蛇尾有翼…冬死而夏生。（南山經）

鮨魚…其狀如蛇而四足。（西次三經）

さらに大水の時には、蟲蛇は魚鼈に變ずるという俗信があり、

禮曰、水潦降、不獻魚鼈。何則、雨水暴下、蟲蛇變化、化爲魚鼈。（後漢・王充『論衡』無形篇）

自然界には、現實に虫と魚との合體を暗示するような現象もあった。

曹叔雅異物志曰、魚跳跳則蜥蜴從草中下。稍相依近、便共浮水上而相合。事竟、魚還水底、蜥蜴還草中。（『太平廣記』卷四十八引『三教珠英』）

このように『山海經』における魚とは、それが水生であることを示すものであり、「人魚」の語は、水中の大魚や、蛟（龍）を連想させる蜥蜴型の生き物を神の世界に屬するものとみ、神の憑依したものとみて人格化していく過程からうまれたのではないかと考えられる。

では、中國の西方にあったという氐人國の半人半魚の人魚とは何だったのだろうか。氐人は、人面魚身で足がな

く、天界と往來することができる。

氐人國在建木西、其爲人人面魚身、無足。（海內南經）

有互人國。炎帝之孫曰靈恕、靈恕生互人、是能上下于天。（大荒北經、互は氐の誤り）

傳說によれば、氐人國は建木の西にあり、建木は諸帝が天界との往來に用いた大木で都廣の地にあり、そこは天地の中心であった。

建木在都廣。衆帝所自上下、日中無景、呼而無響。蓋天地之中也。（『淮南子』墜形訓）

都廣はまた廣都とも記され、漢の武帝の元朔二年（前一二九）には、四川省成都府に廣都縣が置かれたとある（清・顧祖禹『讀史方輿紀要』四川成都府華陽縣の條）。[6] またその頃の蜀の地は、戰國期にすでに湔堰がつくられて水利灌漑が行なわれ（郭沫若『中國史稿地圖』上）、蜀郡は、永和五年（一四〇）に「十一城、戶三十萬四百五十二、口百三十五萬四百七十六」の規模に達し、豐かな土地として榮えていたらしい（『後漢書』郡國志　當時、河南夷は「二十一城、戶二十五萬八千四百八十六、戶百一萬八百二十七」であった）。『山海經』海內經には、そこに「都廣之野」というパラダイスのあったことを傳える。[7]

かつて蜀の地には、氐という異民族が實在していた。氐は、西方の異族として氐羌と並稱され（『詩經』商頌殷武）、海內經ではともに乞姓とする。また氐羌はともに同一の系統で、その一部が川西高原から成都平原にすすんで蜀族の祖となって氐と稱し（童恩正『古代的巴蜀』）、あるいは西南夷の一ともいう。（『史記』匈奴傳　索隱）

氐言抵冒貪饕、至死好利、樂在山谿、本西南夷、別種號曰白馬、孝武皇帝遣中郎將郭冒等引兵征之、降服、以爲武都郡。（漢・應劭、王利器校注『風俗通義校注』佚文）

『山海經』に記された氐人國は、この氐をめぐる傳承とみられる。

しかも氐人のすむ中國西南一帶には、すでにのべたように「人魚」とよばれた鯢鯑や、神話上の人魚のモデルとみられる鯪鯉の類が出沒しており、また四川省彭縣竹瓦街からは、「蜥蜴形の爬行動物」の鑄された短（矛の柄部）が出土し、これは、蜀族に特有なものという（馮漢驥「記彭縣竹瓦街出土銅器」未刊稿。『古代的巴蜀』より）。とすれば氐人の形狀は、彼らの居住した地に出沒した兩生の爬虫類を原型にしたものとみられ、その生き物が彼らの祖靈の憑依として意識されていたのではないか。

都廣之野にはまた、后稷の葬むられたという大澤がある（西次三經　槐江之山）。

西南黑水之間有都廣之野。后稷葬焉。（海內經）

后稷之葬、山水環之。在氐國西。（海內西經）

そこは后稷の神靈の憑る所で、稷澤とよばれ（西次三經）、后稷は死んでから「其半魚」（或いは「其中爲魚」）の形で蘇った。

后稷墉在建木西、其人死復蘇、其半魚、在其間。（前漢・劉安『淮南子』墜形訓）

「其半魚」とは一體どのような形狀なのか。高誘注によれば、「南」の人は、死ぬと魚になって生きかえるといい（「南方人死復生、或化爲魚」）、「其半魚」とは人面魚身、或いは半人半魚と解される。また郭注でも、后稷は形を化えて稷澤中に遯れ、神になったとし（海內西經）、水を媒介として水生の動物に生き返ったとみる。そしてこのことは、この地域の人が、ある特定の水中の生物を神の復活した姿とみなし、畏れていたことを示している。

さらに大荒西經の互（氐）人國の條の次には、水神顓頊が死んでのち復た蘇り、「魚婦」となったという話が記されている。[8]

有魚偏枯、名曰魚婦。顓頊死卽復蘇。風道北來、天乃大水泉、蛇乃化爲魚、是爲魚婦。顓頊死卽復蘇。

珂注によれば、偏枯の魚「魚婦」もまた半人半魚の形狀であり（「以其因風起泉湧、蛇化爲魚之機、得魚與之合體而復蘇、半體仍爲人軀、半體已化爲魚」袁珂『山海經校注』）、蘇る半人半魚の神の說話は古くから民間に流傳していたようである。しかもこの說話は、陝西からさらに西の方で語られていたのではないか。

氐人國の「人魚」もまた、よみがえる半人半魚の神の傳承の一つであったのではないかと考えられる。

二、海人魚

東の海には、白い肌に長い髮の人魚がいる（宋・聶田『徂異記』）。

　查道奉使高麗、見海沙中一婦人、肘後有紅鬚、問之、曰人魚也。

その玉のような肌は、わずかの酒で桃花の色に變じ、臨海の鰥居は、これを養って交りをもったという（元・林坤『誠齋雜記』）。

　海人魚、海有之。大者長五六尺、狀如人。眉目口鼻手爪頭皆爲美麗女子。無不具足。皮肉白如玉、無鱗。有細毛、五色輕軟、長一二寸。髮如馬尾、長五六尺。陰形與大夫女子無異。臨海鰥寡多取得、養之於池沼。交合之際、與人無異。亦不傷人。（『太平廣記』卷四六四所引の唐・鄭遂『洽聞記』）

また南の海上にも女性の姿で現われ（清・陸祚『粵西偶記』）、腰の下は魚身で（宋・徐鉉『稽神錄』）、ものがいえるとも傳えられ（『徂異記』）、その形狀は、沖繩や奄美の近海で發見されるザン（儒艮）に似ている。[9]

　儒艮は、海の哺乳綱海牛目ジュゴン科の海獸で、主にサンゴ礁のある海域に棲息し、三メートル程にも達する紡錘狀の體には左右に人の手のような指を有する鰭があり、兩性とも人に似た性器をもつ。特にその雌が胸の二つの乳房で子供に乳をやる姿は、人の母子の姿にそっくりだという（『萬有百科事典・動物』平凡社）。[10]

中國においても、南の合浦にジュゴンが棲息していたといわれ、またこの類の海獣が沿海に出没していたことが記されている（唐・段成式『酉陽雜俎』巻一七）。

奔鯥一名瀾。非魚非蛟。大如舡、長二三丈。色如鮎。有兩乳在腹下。雄雌陰陽類人。取其子著岸上、聲如嬰兒啼。頂上有孔通頭、氣出嚇嚇作聲、必大風、行者以爲候。

奔鯥は、南方では嬾婦魚の説話として語られ、姑にいじめられて溺死した嫁が魚に變じ（漢・楊孚『異物志』）、その膏は紡績をするには暗く、遊興の際には明るくなるという（明・鄭露『赤雅』下、清・褚稼軒『堅瓠餘集』巻一）。

淮南有嬾婦魚、俗云、昔、楊子婦、爲姑所怒溺水爲魚、其脂膏可燃燈燭、以之照鼓琴瑟博奕則爛然有光、若照紡績則不復明。（梁・任昉『述異記』上）

これにはまた「朝爲泡魚、暮爲嵩豬。朝爲嬾婦、暮爲奔鯥」の諺も傳えられている（清・李調元『南越筆記』巻九、清・杜文瀾『古謠諺』巻二八）。

このように海の人魚は、近海に出没したという儒艮の類から連想されたようで、特にその雌の形狀があまりにも人に似ていたため、男を誘う水の生き物というイメージがつくられたものと思われる。

人魚、長六七尺、體髮、牝牡亦人。惟背有短髮微紅。知其爲魚間。出沙汭能媚人。舶行遇者必作法禳厭。（『廣東新語』巻二二）

ところがやがて、この人魚は海神の一族とみなされ、風雨の時に現われて船に祟りをなす不吉なものとおそれられるようになっていく。

大風雨時、有海怪、被髮紅面、乘魚而往來、乘魚者亦魚也。謂之人魚、人魚雄者爲海和尚、雌者爲海女。能爲船祟、火長有祝云、毋逢海女毋見人魚。（『廣東新語』巻二二）

特に粤の地では海神に對する畏れが強く、航海にあたっては種々の禁忌や祈りがあった。また大風大波は海神の怒りの表われとみなされ、それを鎮めるために人身の生贄も行なわれた（『廣東新語』巻六）。

毎月十八日勿渡、渡則攫海神之怒。又云風渡海風波不起、島嶼晴明。忽見朱旗絳節驂駕雙蛟海女人魚先導從、是海神遊也。火長亟焚香再拜、則吉其。或日影向西、巨舶（鬼船）相遇…火長亟被髪擲錢米以厭勝、或與之決戰不勝、必號呼海以求救海神…

さらに海人や海女、螭の類も、人魚と同様に海神の族として不吉なものとされ（宋・徐鉉『稽神錄』巻四）、

東州靜海軍姚氏率其徒、捕海魚。…忽網中獲一人。黑色、擧身長毛。拱手而立。問之不應。海師曰、此所謂海人。見必有災。請殺之、以塞其咎。姚曰、此神物也。殺之不祥。乃釋而祝之…

人面をもつ水族も、その一族の化身と信じられ、それを辱しめたものは呪われ（『太平御覽』巻六八所引の祖臺之『志怪』「江黃」）、逆に、その命を救ったものには珠寶を贈って恩に報いるという報恩譚も語られた（北宋・劉斧『青瑣高議後集』巻三「異魚記」）。

しかしやはり人魚の話の中心は、男を誘惑し溺死させる危險な水の怪という點にあり、人魚とともに水中の人類を構成するとみなされた蛟、鮫魚、[11]鱟などにも、人を惑わす話が多く傳えられ、難所の由來譚としても語られている（宋・孫光憲『北夢瑣言』「武休潭」）。

蘆塘有鮫魚、五日一化、或爲美異婦人、或爲男子、至于變亂尤多。郡人相戒。故不敢有害心、鮫亦不能爲計。後爲雷電殺之、此塘遂涸。（『御覽』巻七四所引の『述異記』）

特に蛟は、もともと水中にあって蛇に似た四本の足をもつ生き物、卽ち水生の爬虫類の總稱であり（中次一十一經　睨水の條　郭璞注）、やがて神化されて龍の類（海內西經、郭注）、或いは水神とされ（「蜀都賦」李善注）、のちには變應自在

の存在ともなって水の怪や恐怖を代表する（『廣記』巻四二五「伐蛟」）。特に長江流域では、美男美女に變じて人を惑わせたことが多く傳えられている（『廣記』巻四六八所引の『三吳記』「姑蘇男子」）。

蘇州武丘寺山…有石穴、出于岩下、若嵌鑿狀、中有水、深不可測…唐永泰中、有少年經過、見一美女、在水中浴。問少年同戲否。困前牽拽。少年遂解衣入。困溺死。數日、尸方浮出、而身盡乾枯。其下必是老蛟潛窟。媚人以吮血故也（『廣記』巻四二五所引の『通幽記』）。

三、鮫人

鮫人は、南の海底にすんで機を織り、眞珠の涙をながすという。

南海之外、有鮫人。水居如魚。不廢織績。其眼泣則出珠。（晉・干寶『搜神記』巻一二）[12]

このうち眞珠と鮫綃は、嶺南の富を象徴するものであり、特に眞珠は、すでに漢の頃に北部灣沿岸の合浦[13]や北海、東興などを中心とした一帶で盛んに採集が行なわれており、それは莫大な富をもたらすものであった。官吏の亂獲によって合浦の珠が根絶しかかった「合浦珠還」（『後漢書』循吏列傳　孟嘗）のことは、その富の大きさを物語っている。[14]

また嶺南には多くの少數民族がくらし、それぞれ獨特の織物を產していた。特に嶺南西部にすむ壯族の織る壯錦（當時は「緂布」と稱す）と練子布は、唐宋の頃には全國にその名が知られていた（『中國少數民族』人民出版社一九八一）。鮫綃は水につけても濡れず（梁・任昉『述異記』上）、夏にこれをつけると涼しいといわれ（宋・孫光憲『北夢瑣言』）、壯族の「練子布」を連想させるものである。

邕州左右江溪峒地、產苧麻。潔白細薄而長。土人擇其優細長者爲練子。暑衣之、輕涼離汗者也。漢高祖、有天下令賈人、無得衣。練則其可貴。（南宋・周去非『嶺外代答』巻六）

ではこれらの寶を地上の人にもたらす鮫人とは何者だったのか。

鮫人はかつて「蛟人」と記された。蛟人とは人の姿をした龍の屬であり（木華「海賦」張銑注）、晉の郭璞はそれを、顏に入れ墨をし、體に鱗の紋様をえがいた雕題國の人とみた（海內南經）。雕題國の人は、その顏や體に錦衣や魚鱗のような彫り物をし（漢・楊孚『異物志』）、蠃蜂を食う南極の人であり（『楚辭』「招魂」王逸注）、南の海人族蛋人をおもわせる。果して蛟人とは文身の海人族のことなのか。

かって粵の地では、蛟龍の害を避けるために「文身斷髮」の風習が行なわれていた。

常在水中、故斷其髮、文其身、以象龍子、故不見傷害也。（『漢書』地理志　應邵）

特に蛋人や哀牢夷などの潛水を業とする海人族にとって、それは海中の惡魚の害から身を護る厭勝として重要な意味をもっていた。

南海龍之都會。古時、入水采珠貝者、皆繡身面無龍子。（清・李調元『南越筆記』卷十）

蛋人とは、閩粵の沿海で船を家として海上にくらし、漁を生業とした異民族である。[16] 彼らは潛水を得意とし、漢の頃には合浦の珠池において眞珠を採っていた（漢『異物志』）。

海上水居蠻也。以舟楫爲家。採家物爲生且生食之。入水能視。合浦珠池蚌蛤、惟蜑能沒水探取房。人以繩繫其腰、繩動搖則引而上。先煮蠡衲極熱、出水急覆之。不然寒慄而死。（宋・范成大『桂海虞衡志』）

ところが合浦の海中には、常に魚虎や鮫魚などの人喰いサメの類が出沒しており（『嶺外代答』卷七）、彼らはその害を避ける爲に「繡面文身」の習を行ない、自らを蛟龍の子孫と稱し、「龍戶」とよばれた（『廣東新語』卷一八蛋家艇）。

蜑人神宮、畫蛇以祭、自云龍種。浮家泛宅…捕魚而食。不事耕種。不與土人通婚。能辨水色、知龍所在。自稱龍神（人？）、籍稱龍戶。（明・露湛若『赤雅』下）

すなわち彼ら南方の海人族は、人面蛟身の「蛟人」に扮して、海底の珠寶を地上に運んだのである。また人面蛟身の蛟人は、「人魚」のことでもあった。蛋人の一つ「盧停」は、それが人魚の族とみなされ、「牝牡」があって、その牝は捕えられると、男性の性の對象として扱かわれていたと記されている。

人魚之種族有盧亭者、新安、大魚山與南亭竹、沒老、萬山多有之。其長如人而有牝牡。毛髪焦黄而短眼睛、亦黄、而黧、尾長寸許。見人則驚怖入水。往往隨波飄至、人以爲怪。競逐之。有得其牝者與之婬。不能言語、惟笑而已。久之能著衣、食五穀。携至大魚山、仍沒入水。(『南起筆記』巻十)

以上のことから、蛟人とは本來蛟人の意をもち、人喰い鮫に對する厭勝として體に文身し、丹青をほどこして蛟人に扮した海人族蛋戸のことをモデルにしたのではないかと思われる。

ところで一般に、異民族は常に漢族からみれば蔑視の對象であり、蛋戸もその例外ではなかった。彼らは、その性質が「粗蠢、不識禮數」であり、「蛋家賊」とよばれて海賊の一族として恐れられた。

(蛋家)本鯨鯢之族。其性嗜殺。彼其大艟小艑出沒…又與水陸諸兇渠相爲連結。(『太平廣記』巻七)

また蛋人は、明の洪武年間から清の雍正年間に至るまで陸居を許されず、常に大層貧しかった(清・吳震方『嶺南雜記』)。

昔時稱爲龍戸者…今止名曰獺家。女爲獺而男爲龍。以其皆非人類也。…有居陸成村者、廣城西周墩林墩是也。然良家不與通姻。以其性兇善盜、多爲水鄉禍患。(『太平廣記』巻一八)

彼らが採集した眞珠は悉く官の管理をうけ、

合浦民善游採珠、兒年十餘歳、使敎入水、官禁民採珠、巧盜者蹲水底刮蚌得好珠呑而出。(漢・『異物志』)

密かに採った珠も、奸商によって僅かの品物と交換されてしまい、彼らは單に眞珠を運びだす道具にすぎなかった。

鮫人とは、人でありながら人とは認められなかった海人族蛋戸に對する蔑稱だったのではないだろうか。

珠熟之年、蜑家不善爲價。冒死得之、盡爲黠民以升酒斗粟、一易數兩。既入其手卽分爲品等銖兩而賣之。城中又經數、乃至都下、其價遞相倍、蓰至於不貲。（『嶺外代答』卷七）

ところで廣東省靖康場（東莞縣）の海上には、夜半から曉方にかけて、螺女や鮫人たちがにぎやかな市を開いたという「海市」のことが傳えられている。

海市多見於靖康場。當晦夜、海光忽生、水面盡赤、有無數燈火。往來螺女鮫人之屬、喧喧笑語。聞賣珠鬻錦數錢量米麥聲。至曉方止、則海市也。（『廣東新語』卷二）

これは、夜間に實際に開かれたという「鬼市」[16]を思わせる。別れに涙を眞珠にかえて地上の人におくったという鮫人の傳承からは、このような幻想的な話もうまれた。

中國には、以上三種の「人魚」が存在する。それは、近海に出沒した儒艮の類から連想された海人魚、眞珠採りに從事した海人族をモデルとした蛟（鮫）人、そして最も古く、陝西から蜀にかけての西方の地において傳えられたとみられる半人半魚の死して蘇る神「人魚」とその子孫の氐人のことである。

注

（1）『オリエントの神話』（G・H・リュケェ　J・ヴィオー　F・ギラン　L・ドラポルト　中山公男譯　みすず書房）によれば、エアは《水の家》を意味する語で、シュメール地方においてはエンキ（大地の救世主）とよばれる。彼は《不毛の海》の神ではなく、大地をとりまき、同時にその支柱ともなっている甘い水アプスーの神である。故にその長子マルドゥークは、水の豐饒なる力を人格化するもので、農耕神としての性格を備えている。アタルガティス（デルケトー）は、シリアのヒエロポリス・バムビュケーの豐穰の女神で、その身體は顏は人間で胴以下は魚形。湖におちて魚になった、或いは魚に救われたとも傳えられ、バビロンの女王セミラーミ

ス（《鳩から來た者》）をうむ。ヘレニズム時代以後その信仰が廣く行なわれ、魚と鳩が聖獸であったという。『龍とドラゴン』（フランシス・ハックスリー著　中野美代子譯　平凡社）によれば、人魚はギリシアの半人半蛇の海神ネレウスの族という。彼は船乘りの保護者で、姿を自由に變ずる力と豫言の力をもち、海の底（特にエーグ海）に住んだ。ネーレイスは、彼の50人（或いは百人）の娘達で、父の海底の宮殿で黄金の椅子に坐し、歌い踊り、つむぎ、一般の娘と同じ生活を送る美女と想像されている（『ギリシア・ローマ神話辭典』）。また「オデュッセイア」には、上半身が女で下半身が鳥の形をした海の怪物セイレーンのことがみえる。セイレーンたちは人を魅する歌い手で、その歌を聞いた船乘りは引きつけられて溺死したという。半人半魚の人魚のことは、このネレウスの族とセイレンとが合體したもので、これがヨーロッパで語られるようになるのは十三世紀以降という（『龍とドラゴン』）。

（2）『史記』秦始皇本紀にも「人魚膏」の語がみえ（「九月、葬始皇驪山、…以人魚膏　爲燭、度不滅者久之」）、『漢書』劉向傳では、「石槨爲游、人膏爲燭、水銀爲江海、黄金爲鳧雁」と記される。『正義』では、人魚は鯢魚のこととあり（廣志云「鯢魚聲如小兒啼、有四足、形如鱣、可以治牛、出伊水」）、『本草綱目』集解でも「其膏然之不消耗。秦始皇驪山冢中所有人膏是也。」（鯨魚）とする。『中國の動物地理』（中國自然地理編集委員會編）によれば、現在、チュウゴクサンショウウオの自然分布は、北は山西、陝西から、南は廣西に及び、西は青海湖から、東は濱海の大部分に至るという。

（3）鯪魚は「鯪音陵一作陵、鯪魚鯉也。一云陵鯉也。有四足形似鼉而短小。出南方。」（『楚辭集註』）「沈懐遠南越志曰、鯪魚鯉也。如蛇而四足。腹圍五六寸、頭似蜥蜴、鱗如鎧甲、異物志謂之鯪鯉。」（『初學記』巻30）陵鯉は「陵鯉若獸、有四足、狀如獺、鯉甲似鯉、居土穴中、性好食蟻」（「吳都賦」劉注）また『魏書』高祐傳には、陵鯉は吳楚の地の産で、都の人はこれを知らないとある。龍魚は「龍魚陵居在北、狀如鯉。」（「思玄賦」李善注）「龍魚一角、似鯉居陵、候時而出、神聖攸乘、飛騖九域、乘雲上雲」（『藝文類聚』巻96）　䲢魚は「䲢魚如鯉魚也、有神聖乘行九野、在無繼民之南。」（『淮南子』墜形訓高誘注）袁珂氏は龍魚と陵魚が同一のものであることの理由を㈠龍陵とも「一聲之轉」㈡陵魚の「陵」は水陸に住むことを示し、龍魚も「陵居」である、㈢ともに鯉に似ていることから、龍鯉、陵鯉とよばれた、㈣龍魚は一説に「鰕」というが、鰕は鯢魚の大型のもので、鯢は「人魚」のことである。陵魚は「人面手足魚身」で正に「人魚」の形狀である、とする。

（4）『本草綱目』鱗部蜥蜴の條によれば、蜥蜴は生息地により三種あり、山間の岩の間に居るのを石龍、蜥蜴、猪婆蛇といい、草澤の地にでるのを蛇醫、蛇師、蛇舅母、水蜥蜴、蠑

螈、家屋の壁などに出、やや短小なものを蝘蜓、守宮とよぶ（南楚では蛇醫、蝶螈、南陽で蝘蜓、秦晉西夏では守宮）。蜥蜴については、死と蘇生を主題にした説話が、世界の各地に傳えられている。南方熊楠『十二支考—田原藤太龍宮入りの譚』によれば、これは太平洋諸島で最も尊ばれ、メラネシア人はこれが家に入れば死人の魂が歸ったといい、ポリネシア人はこれを神、人間の祖とみなしたという。

（5）「今江湖極多。形似守宮、鯪鯉輩、而長一二丈、背尾俱有鱗甲。夜則鳴吼、舟人畏之。」「其聲如鼓、夜鳴應更、謂之鼉更、俚人听之以占雨、南人珍其肉、以爲嫁娶之敬。」（『本草綱目』鱗部鼉龍の條　集解）

（6）『華陽國志』蜀志に「廣都縣、郡西三十里、元朔二年置。」と記され、『蜀中名勝記』（明・曹學佺）では、これは今の成都近くの雙流縣の境とする。なお王念孫によれば、廣都と記すのは『後漢書』張衡傳注、御覽卷九五九、類聚卷八五・九十で、都廣は、御覽卷八三七、類聚卷六。

（7）「西南黑水之間、有都廣之野、后稷葬焉。爰有膏菽、膏稻、膏黍、膏稷、百穀自生、冬夏播琴。鸞鳥自歌、鳳鳥自儛、靈壽實華、草木所聚。爰有百獸、相羣爰處。此草也、冬夏不死。」（海內經）。郭注に「其城方三百里、蓋天下之中、素女所出也。離騷曰『絕都廣野而直指號。』」とある。

（8）「風道北來、天乃大水泉」は、郭注では、泉水が風をうけて急に溢れでると解するが、「冬南夏北、有風使雨」（清・杜文瀾『古謠諺』卷三九占風諺）という謠諺で夏の北風が雨をよぶと傳えられることから、大水となると解することもできるのではないか。とすれば大水の時に蟲蛇が魚鼈となるという俗信と（『論衡』無形篇）、次に續く「蛇乃化爲魚」の本文と一致する。ところで「偏枯」は、古來禹が治水で病み疲れた姿とされるが（『列子』注等）、經文では魚婦も偏枯の魚であり、珂氏はこれを半人半魚とみる。神話上の半人半魚は、本文で述べた如く人面魚身と人面蛟身の意をもつ。卽ちそれには爬虫類のイメージが含まれる。また「禹」の字は、本來四本の足をもって爬行する動物の象形とされ（『說文段注』）、偏枯ともいう（『莊子』盜跖篇）。とすれば魚婦における偏枯は、爬虫類の形狀を示すものではないか。ところで中國最古の土器文化といわれる仰韶文化には、その土器に多くの魚文と人面紋が描かれている（吳山編『中國新石器時代陶器裝飾藝術』文物出版社'82.8）。一九七二年、陝西省臨潼姜寨遺出土の「彩陶人面魚文鉢」の人面紋は、圓形の人面に濃い眉、み開いた兩眼、三角形の鼻が描かれ、頭と兩頰に尖形（三角形）の飾物をつける。この鉢は底に穴があり、棺の口をふさいで出土した。當時幼兒が死ぬとその遺骸を陶製の甕棺に收め、穴をあけた陶盆でふたをしたという（一九七七『中華人民共和國出土文物展』解說より）。人面紋については出土當時から論議がなされ、「人面形的花紋很逼眞、眼口鼻皆全、头上有交叉的尖紋飾、可能就代表當時人头上的一種裝飾。」（'55『考

古通訊』第三期「新石器時代村落遺址的發現」)、「當时的人和魚有着相當密切的关系。」('56同第二期「西安半坡遺址第二次發掘的主要收獲」)、「不是人臉的圖案、而是水中形象的圖案化」('56同第六期「關于西安半坡人面形彩陶花紋形象的商榷」)など。白川氏は、夏系の文化では洪水神を人面魚身で表わしていたらしく、禹はもともと魚形の神で、この人面紋は禹の姿を象ったものとする(『中國の神話』)。

(9) 『神・人間・動物—もの言う南海の人魚〈儒艮〉』(谷川健一)によれば、儒艮は琉球王府の公用書では海馬と記され、王族が正月にその肉を食って美味であったという。また人魚の肉を食って八百歳の長壽を得たという八百比丘尼の話は、隱岐、出雲、伯耆、若狭、能登など黑潮のとおる日本海海岸に點々として古代の海上交通の道を暗示させる。人魚の傳說は中國の東海、南海沿岸に傳わる海人魚、海人のこととのつながりをも考えられるかもしれない。またザンは「よなたま」ともよばれ(『宮古島日記』)、潮の干滿を支配する海靈(よたたま)との關連が語られている。『魚と傳說』(末廣恭雄)によれば、日本で初めて半人半魚の生き物のことが記されたのは『日本書紀』(推古天皇の頃)であり、上半身が美女となったのは『甲子夜話』(松浦清山 文政四年起稿)あたりという。

(10) 海牛は哺乳綱海牛目の海獸の總稱で、ジュゴン科(一生の大部分を海中ですごす)、マナティー科(河水)、大海牛科の三科があり、現在よりも過去に多く生息したであろうという。

(11) 獺は哺乳綱食肉目イタチ科の一種。日本にも獺が人を化かすという話があり、大入道、川天狗等は、獺がその正體らしい。また川の靈獸としても信仰された(『萬有百科事典・動物』)。『本草綱目』獸部には山獺と水獺のことがみえ、水獺は「狀似狐而小、毛色青黑、似狗、肤如伏翼、長尾四足、水居食魚。能知水信为穴、乡人以占潦旱…」と記されている。

(12) 晉・張華『博物志』巻二異人、『太平御覽』巻八〇三、『藝文類聚』巻六五・八四にも同様のことが記され、「俗傳、從水中出、曾寄寓人家。績日賣絡。絡者竹孚俞也。鮫人臨去、從主人索器、泣而出珠滿盤、以與主人。」(『文選』「吳都賦」李善注、『博物志』佚文?)という話も傳えられている。また郭氏『漢武洞冥記』巻二には、「此國(吠勒國)去長安九千里、在日南。人長七尺、被髮至踵、乘犀象之車。乘象入海底、取寶、宿於鮫人之舍、得涙珠、則鮫所泣之珠也。亦曰泣珠。」とみえる。さらに『蒙求』(唐・李翰)にも「洲客泣珠」とあり、詩賦にもたびたびとりあげられた。曹植「七啓」、木華「海賦」、陶弘景「水仙賦」、李夷亮「魚在藻賦」、馮宿「鮫人売絡賦」、岑參「送張子尉南海」詩等。

(13) 「珠出合浦。海中有珠池。…相傳海底有處所如城郭。大蚌居其中、有怪物守之、不可。」(宋・范成大『桂海虞衡志』「志蟲異」)

(14)「孟嘘字伯周、會稽上虞人也。…遷合浦太守。郡不產穀實、而海出珠寶、與交阯此境、常通商販、貿糴糧食。先時宰守並多貪穢、詭人採求、不知紀極、珠遂漸徙於交阯郡界。於是行旅不至、人物無資、貧者餓死於道。嘘到官、革易前敝、求名病利。曾未踰歲、去珠復還、百姓皆反其業、商貨流通、稱爲神明。」(『後漢書』循吏列傳)

(15) 蛋戸には「魚蛋取魚、蠔蛋取蠔、木蛋伐山取木」(清・吳震方『嶺南雜記』)の三種があり、人魚とみなされた盧亭(盧循)は、蠔蛋の一種である。「昔據廣州既敗、餘黨奔入海島、野居。惟食蠔蠣、疊殼爲牆壁」(唐・劉恂『嶺表錄異』上)「海夷盧亭、往往以斧挈取殼、燒以烈火。蠔卽啓戸、挑取其肉、貯以小竹筐、赴墟市以易酒(盧亭好酒)。」(同下)

(16)『地獄變』「第三章　入冥譚」(澤田瑞穗　法藏館)によれば、「鬼市」には二種ある。一は深夜や曉方にたつ臨時の市で、現實の商習慣であり、もう一つは、冥界の鬼が一所に集まって日常品等を交易すると想像された空想の市である。「西海有市。貿易不相賣、各直置物於旁。名鬼市。」(『唐書』西域傳)「狼朊之民、冥夜爲市。以鼻嗅金、卽知美惡…」(北魏・麗道元『水經注』溫水注)「番禺雜記、海邊有鬼市。半夜而合鷄散人。從之多得異物。殆所謂狼朊之民也。」(『廣東新語』卷二)